

令和4年度第1回公立大学法人長野県立大学評価委員会

日 時：令和4年8月1日（月）

13時30分～16時00分

場 所：長野県経営者協会 大会議室

1 開 会

○山寄高等教育振興課長

定刻になりましたので、ただいまより、「令和4年度第1回公立大学法人長野県立大学評価委員会」を開会いたします。

私は、本日の司会を務めます事務局の高等教育振興課長の山寄哲哉と申します。本日はよろしく願いいたします。

それでは最初に、長野県県民文化部の山田部長より御挨拶を申し上げます。

2 挨 拶

○山田県民文化部長

県民文化部長の山田明子でございます。どうぞよろしく願いいたします。開会に当たりまして、一言御挨拶申し上げます。

本日は、大変お忙しい中令和4年度第1回公立大学法人長野県立大学評価委員会に御出席をいただきまして、厚く御礼を申し上げます。

今年で4回目の評価となりますが、委員の皆様には、これまで毎回大変熱心に御議論をいただきまして、県立大学の中期計画の達成に向けて、幅広い視点から貴重な御意見や御提言を賜っており、深く感謝を申し上げます。

県立大学は、昨年度開学から4年目のいわゆる完成年度を迎えまして、歩年3月に初めての卒業生を送り出しました。こうした中で、新型コロナウイルス感染症でございますが、現在第7波となっており、これまでになく感染拡大の状況となっておりますが、大学におきましては、これまで大学の特色であります1年次全寮制の入寮制限やワクチンの職域接種など、感染状況に応じて感染対策を徹底しながら、教育効果や学生生活の充実にできる限り配慮した運営がなされております。

本年4月からは、ソーシャル・イノベーション研究科と健康栄養科学研究科の2学科から成る大学院が開設をされました。開学から5年目を迎えまして、様々な課題に取り組んでおりますが、評価委員会による評価結果を大学や県民に広く共有して、県立大学の教育、研究、また地域貢献など取組の一層の充実や改善につなげてまいりたいと考えております。

委員の皆様方には、御多忙のところ非常にタイトなスケジュールでの評価をお願いしております。大変恐縮ではございますが、どうぞよろしくお願い申し上げます。

○山寄高等教育振興課長

山田部長につきましては、後ほど会議が入っておりまして、3時30分ぐらいに退室させていただきます。それまでは同席させていただきますが、よろしくお願いいたします。

本日の出席者を御報告いたします。本日はウェブで伊藤委員が出席、沼尾委員は都合により御欠席となっております、5名中4名の出席をいただいております。

それでは、以後の議事の進行につきましては山沢委員長にお願いしたいと思っておりますので、よろしくお願いいたします。

3 協議事項

公立大学法人長野県立大学の令和3年度（2021年度）実務実績について

○山沢委員長

それでは、本日の議事に入ります。

本日は、令和4年度の最初の評価委員会ということでございます。

○山沢委員長

本日の評価委員会は、法人からの提出がございました令和3年度の業務実績報告書に基づきまして、各委員には、事前に小項目評価を行っていただきました。時間のないところ、本当にありがとうございます。本日は、その各委員の評価に基づいて、小項目全体についての方向性、委員会としてこういう評価で行こうというお話をしたいと思っております。

そこで、基本的な考え方となりますのは、本日の資料2にございますように、業務実績評価に関する基本方針によって評価委員会として評価をつけるということにしたいと思っております。何とぞよろしくお願い申し上げます。

本当は1項目ずつ番号順に全部やっていけばいいんでしょうけれども、時間に限りがございます。かといって、私の一存でここはいいやというわけにはまいりません。そのようなことをするつもりはございませんけれども、事務方と何回か打合せをしまして、ここは議論をもう一回してもらわなければいけないということはきちんとしていただくつもりでやっていきますので、何とぞよろしくお願いいたします。

小項目の評価ですが、1から始まり95項目ございます。何とぞよろしくお願いいたします。では、事務方から、今の説明でいいとは思いますが。

○山崎高等教育振興課長

この95項目中で、各委員さんのところには丸がしてある項目があるのですが、丸をしてあるのは法人の評価と違う評価になります。これが27項目ありますので、その点を御承知の上、進めていただきたいと思います。

○山沢委員長

それでは始めたいと思っております。

まず、簡単などころから。小項目1、黄色くなっておりますが、「教育」とあります。これは大項目ですが、大項目が11ございまして、その最初が「教育」ということです。教

育は三つに分かれていて、その最初が(1)の「人材育成の方向」となります。その第1項目が1、令和3年度の年度計画としましては、見ていただきますと、「各学科のディプロマ・ポリシー……」と書いてあります。それに対して法人が令和3年度は、この計画にのっとってこういう実績をしたというのが、「ホームページ上で各学科の……」と書いてあるとおりでございます。法人評価の自己評価としてはaです。

s、a、b、c、dはどうやってつけたかというのは、資料No.3を見ていただきますと分かりますので、そこは各自御了解しているかと思えます。各委員は全員aということで、法人と同じ評価になっているわけでございます。こういうことでございますので、この委員会としてもaとしたいと思えます。よろしいですね。こういう感じでいきたいと思えます。

早速2番にまいります。見ていただきますと、学長が新入生と、今年はオンラインで個別面談をやっていて、これに対しての評価が委員の中で分かれています。大学側はaと言っていますが、私と山浦委員はs、あとのお三方はaです。

これについては、山浦委員、いかがでしょうか。

○山浦委員

ここに書いてあるとおりです。これは、前回も前々回もsをつけたと思えます。最初にsなんです。なんで評価が下がっているのかわからないので、いつもsで、同じことをやっているところがあって、評価全体でそうなんですが、同じことをやっていると同じなのか、下がっていつてしまうのか。革新的なことを常にやっていないと現状維持で、その辺の評価の基本的なスタンスがはっきりしていないものだから何とも言えないのですが、学長は謙遜する人ですから、遠慮しているのではないかというのがあるんですね、ほかのものとは比べて。ということがありまして、ぜひsでお願いしたいと思えます。

○山沢委員長

どうでしょうか。sというお話が出ていますが。

○生駒委員

これについては、山浦委員から、前年度と同じような発言をされました。そのときに、過去3年間で、初年度が学長がよく貢献しているということでsにしました。次年度はaにしました。3年目も議論の末にaに落ち着いた経緯を申し上げますと、このsというのは特に優れた実績を上げているということになりますから、実績をどう上げたかということについて議論をしたと思えます。

昨年度のコメントでは、この個別面談の効果の検証と学生のフォローアップを検討するというコメントを付したんです。ですから、昨年と同じことをやっていて、しかし、優れたことをやっているのだからsではないかという御意見もあったと思うのですが、昨年度は効果の検証と実績をどう評価するのかということで、効果の検証とフォローアップを検討するというコメントを付したのですが、それについての判断のところに見解が書いていない。全く前年度と同じことをやっていて、sなのかという話になるかと思えますが。

やはり昨年度と同じことをやっていて、sということも評価のあり方としてはあると思いますが、次年度はもう少しフォローアップされていればsだったかもしれない。

○山沢委員長

私はsにしましたけれども、ただいまの生駒委員の御意見、大学が事業に対してきちんとした効果の評価をすべきだと、自らすべきであるということについては確かにそのとおりだなということで、aに変えたいと思います。

○生駒委員

これは学長に遠慮してaにしたのではなくて、自己点検委員会がaと判断をしたんですね。

○山浦委員

形の上はそうですね。

○生駒委員

ですから、評価委員会として独立して客観的に評価するわけですからね。

○山浦委員

客観的に評価するんだから、法人の評価がどうという話とは別の話で、ここは評価するのだから。他にも、同じことをやってみんなaのところは山ほどあるわけです。項目が「～した」というのがいっぱいある。「～をしたからaにする」とみんななっている。「～したから」といってaにすると効果は何もない。やったという事実があって、それでaにする。それを見ていくと、効果を求めるのは問題があると私は思っています。

○生駒委員

私はこの欄で意見を書きましたが、行政評価ということをやってほしいと提案しています。今おっしゃったことです。効果を測定しろと。予算配分したら、その予算に対して評価をしてくださいと。

○山浦委員

分かりましたけれども、そもそもこの進捗度合いや効果があったかないかということを問うているのはほとんどない。

○生駒委員

そこは問題です。

○山浦委員

問題というのは変ですがこれだけそれを求めるというのは、私はおかしいと思っています。

○生駒委員

ただ私は、学長がどれだけ時間があるのか、大学全体を見ていると思いますけれども、学長のお仕事でしょう。

○山浦委員

ほかの大学はやっていますか。やっていないと思いますよ。

○生駒委員

それは人数が多いですからね。

○山浦委員

それはそうかもしれないけれども、やっていないでしょう。

○生駒委員

それでsにしたんですね。

○山浦委員

だからsでいいじゃないですか。

○生駒委員

他の委員にもお聞きしてください。

○山沢委員長

伊藤委員、御意見お伺いいたします。

○伊藤委員

こちらの年度計画での目標が、新入生が自ら考え4年間の目標設定をする機会を与えるということが目的だと拝見するんですが、今回学長面談をしたのは226人で、残りの17名の新入生はこのように目標設定する機会があったのかどうかということが書かれていなくて、学長面談をしましたということが話の中心で結果報告がされているので、やはりこういう時期だから、一人一人の学生と向き合う時間を取り続けているということは、山浦委員がおっしゃるようにとても重要なことで、高い評価をされることだと思うのですが、大学そのものが目的としている新入生の目標設定の機会が取れない学生については、どのような対策を設けて実施したのかということまで明記されていないので、sにするまでの状態とも判断できなかったもので、私はaといたしました。

○山沢委員長

いかがでしょうか、山浦委員。

○山浦委員

ちょっとこれはやはり問題があり、ほかの英語でも出てきます。去年も申し上げたんですが、英語を「やった」というのはいっぱいあって、みんなaです。本当は中身はdなんですよね、これ。にもかかわらず「やった」というのは全部aです。初年度もこれで、効果が出ないことをやっているのは全部aじゃないかと申し上げたんだけど、それは違うと。そもそも効果測定というのは、やったことに対して効果まで問うているのかが非常に問題があると思います。

○生駒委員

私は問うべきだと思います。この委員会として。

○山浦委員

そうすると、ほとんどdになってしまう。

○生駒委員

目標設定自体が何々をするということで、それを実施していることは事実なので。

○山沢委員長

ただいまいただきました御意見をきちんと文章にまとめて、それを委員会の意見として必ずつけるということでaということで、山浦委員、よろしいですか。

○山浦委員

はい。

○山沢委員長

では、これはsをaに変えます。

次は小項目3、総合科目の全てで授業にディスカッション、ディベート等を含むようにしているということです。これはしているということで、全員aです。これもよろしいですね。これも先ほどの議論を全く同じになりますが、しているというだけです。

次は、小項目4、発信力ゼミをやっているということです。少人数で一クラス16人で15クラスに分けてやっているということです。大学側はaです。

これについて、発信力ゼミはこうあるべきだという意見も出ておまして、先ほどの議論と全く重なるところがございます。これも委員会として意見をつけたいと思います。それについてはお任せいただいて、次回に皆さんにこうしましたということでよろしいですか。これもaということで評価させていただきます。

次は5、グローバル教養ゼミというものがあるのですが、こういうものを開講している。専攻分野とは異なる領域について幅広く、かつ深い学びの機会を提供するという事です。これについて、伊藤委員がb評価で、あとの委員はaということでございます。

伊藤委員、bとした意見を簡単にお願いします。

○伊藤委員

先ほど山浦委員から、基本的な目標や評価が、「実施した」でa評価となっているということですが、ここでは実際に実施した結果、どのぐらいの受講があったかということで、28人で、これは全学共通ということなので、3年生を現時点で足すと237人、そうすると1割ぐらいの参加であったということが、本来の目的に対してその人数が100%以上の年度計画の達成となるのかということについて、いかにグローバルマネジメント学科だけではなくて、こども科や健康科のほうも含めると、せっかく設置しているならば、もう少し受講に対して結果が出てもいいかと思いましたのでb評価と。おおむね実施しているという、100%以上とは言えないのではないかと思います、bといたしました。

○山沢委員長

ありがとうございます。

○生駒委員

おっしゃるとおりで、今回受講生は28人です。次年度の計画で何人を目標にするのか。100%というのは難しいのですけれども、深い学びの機会を提供すると。提供したわけです。それに対して学生は選択するわけです。受講するかどうかを。そういう機会を与えたのに少ないという疑問があるのですが、それは上げる努力をして、これを来年度は何パーセントぐらい努力して増やそうかという目標値を計画の中に織り込んで、それを達成目標にして、達成したらばaだと。もっとさらにそれを越えて達成すればsという評価もあるでしょうし、下回ればbだと。そういう評価の目標、大学側が人数目標を定めるべきだと思うんですね。

そういうことであれば達成度が測定できるのですが、今のやり方を踏襲していくと、提供したからaだとかbということだと判断に困ってしまうわけです。

○山沢委員長

ただいまの御意見は本当にそのとおりでございます、まず一つは、28人で本当にいいのか。そんな少人数でいいのかということ。それから少なくとも次年度もずっと続けるわけですが、次年度は受講学生数の目標を立てて、さらに、増やす努力が必要だということを、この評価委員会の厳しいコメントとしたいと思います。

評価そのものについてはいかがでしょうか。伊藤委員、aというわけにはいきませんか。

○伊藤委員

今の付帯意見をつけていただければ。ただ、ほかの様々な科目も選択できると思うんですけども、特にこれについても目標に挙げている科目だと思うものですから、そういう意味で学校が重視されている科目について、次年度以降、やはりどういう学生を育てていくのかという方針に絡む科目かと思ったので、それに対して、実際には6クラスという編制もされたという努力はうかがわれると思っています。

実際に学生さんの反応がもう一つであったということならば、やはり開学の意味だとか、大学としてやはり3年生に対して、より次へ向かってのステップアップをどう育成してい

きたいのかというところが、ちょっとやはり弱くなってしまいう学年なのかと思うので、そういう意味では、私の評価は変えませんが、全体の評価はaで構わないです。

○山沢委員長

ありがとうございます。では、委員会としてはa評価としたいと思います。ただいま厳しいコメントも出ましたので、それを事務方にもしっかり書いてもらいます。

次は小項目6、必修の英語の授業です。これを授業改善も含めて充実したものにしていくというものでございます。沼尾委員は、25人程度とあるがそれを超えるのは語学クラスの場合少人数とは言えないのではないかという厳しい指摘をしております。山浦委員も、1クラス25名で小人数かという御意見です。こういうところも含めまして、沼尾委員はb評価です。

これも、ただいま読み上げましたことをきちんと明記して、コメントをきちんとつけて、委員会としてはa評価としたいと思います。よろしいですか。

○山浦委員

これは25人が目的じゃないんですね。英語の試験の600点、700点が目的で、去年もこれはおかしいと。語学学校へ行けば1対1や1対5ぐらいのクラスで、こんなことで上がらないと、こんなことでいいのかということ去年私も言って、私はcをつけたと思いますが、何だか知らないけれども25人でやっているからいいんだということで。これはやっぱり論理でいうと、非常におかしいと思います。25人だって、今年は考え直したらどうかと。抜本的改正をしたらどうかと思っておりますが、こんなことでやっていたら、全然TOEICの目標達成なんてできませんよ。なかなか行かないと思います。

目標を変えたらどうですかという話もしたんですけども、TOEIC何点とか、それも駄目だと言って、どうもこれは少しおかしいんじゃないかと思えます。

○山沢委員長

大学側が言うところの少人数教育というのが目的ではなく、目的はもっと高く、TOEIC700点をみんなで取ろうということ、英語力を本当につけさせるという授業としてこの小項目6の年度計画が実施されているのか、そこを教員に問いたいというコメントをつけてください。ということで、一応aとさせていただきます。

次は小項目7、グローバルマネジメント学科、各学科で学生の興味・関心、将来の進路等に応じた丁寧な履修指導を行っている。これはどこでも当たり前のことですが、グローバルマネジメント学科は、令和3年度の実績を見ていただきますと、1年次には履修案内・学生便覧にコースごとにといろいろやっていて、食健康学科は1～3年次ともに授業開始前にオンラインガイダンスをしたと。こども学科では、各年次で授業開始前にオンラインガイダンスをやったということで、ちゃんと決められた指導をしているということで、法人としてはa、委員としては皆さんa評価ということでaとしたいと思います。

次は小項目8、これはグローバルマネジメント学科が、学生が選択したコースで自らの問題意識や将来の進路等に応じた学びができるように指導を行う。2年次以降開講のゼミナールで、どういうゼミナールがいいかという相談にも応じる。主体的な学びができるよ

うに促していくということです。

それを具体的にどういうふうにしたかというのが次の右側の欄に書いてございまして、ゼミナールをやったということで、委員は全員やったことは認めようということでaです。委員会としてaということでよろしく申し上げます。

次は小項目9、令和3年度に係る実績のところを見ていただきますと、学内での代替授業やオンラインを活用し、臨地実習における実習時間500時間を確保したと。コロナ禍だけれども、実習もきちんと時間を確保したということをおっしゃっています。そこが一番のポイントになるかと思えます。確かにオンラインの実習はなかなか大変だと思いますが、そこをそれなりにやれたということです。

ただ、学生がそれに対してどのような評価をしているかについては聞いていないですね。学生の評価は知りたいところですが、実習時間500時間は確保したということですので、委員は一応aとつけておりますので、aといたします。

次は小項目10、こども学科の2、3年次生のこども学科ゼミという専門的なゼミをやり、4年生には卒業研究を開講すると。いわゆる専門指導とありますが、そこをきちんと行ったということです。これもこども学科ですから、実習をきちんとさせなければいけないことがポイントになると思えますけれども、もちろん卒業研究もそうですが、そこを何とかやったということで、一応保育所での教育実習、それから施設での実習をこなしたということですので、aの評価としました。よろしいですね。

次は小項目11、1年次の学生には2年次の海外プログラムに向けた最終的な意識づけが行えるように情報提供と併せて事前学習を実施する。これは毎年恒例でやっているところです。具体的にどういうふうにできたかということですが、山浦委員が聞いておりますが、実際の海外研修とオンラインでは効果がどうか。オンラインでは落ちるのではないかと、そういうことも考えて、ガイダンス、準備をさせているのかということが一番私たちとしては聞きたかったわけですが、それについて十分なお答えは得られていないと考えています。

令和3年度における実績の「・」の二つ目、令和4年度の海外での対面実施再開に向けて、現地関係者等との綿密な確認及び調整を踏まえ検討した結果、国内外におけるコロナ禍に収束が見られず、安全なプログラム運営の見通しが立たないことから、令和4年度後半または令和5年度への実施延期を決定し、12月に学生及び保護者を対象とした説明会を開催したということですので、時間を延ばそうということは考えられたと。

では、具体的にどうそれを処理していくか。その辺についてはお答えがないということですので、その辺は非常に心配だと。次年度重なった場合の海外研修の在り方も検討しているのかどうかを、ぜひ評価委員会のコメントとしてつけて、aという評価でよろしいですね。

次は小項目12、グローバルマネジメント学科と食健康学科の2年生の学生、こども学科では3年次の学生に対して、ゼミ単位または研修先単位をこういうものなんだということで事前に勉強させようというプログラムでございまして。一番のポイントは、沼尾委員が聞いておりますが、海外研修に参加を予定した学生をどう位置づけるかという疑問が生まれ

てくると。

まず、委員会から事務的に問い合わせしております。海外プログラムに参加予定だった学生で、体調不良などの事情で参加できなかった学生について、それまで準備していたがプログラム直前に急遽体調を崩されたのかということも含めて聞いております。これに対しては、体調不良があった学生もいたそうです。その学生は、履修を再度検討できる段階になったら、そのときに改めて履修を計画するというところでございます。

当初の目標をどう定義するかによるとのことですが、令和3年度中の参加対象学生とする場合は、当時の3年生が168名、4年生が3名いて、それでGM学部が171名となり、うち170名が参加しているということです。

それから、学籍変更、休退学や体調不良などの個人的な事情により、やむを得ず参加できない学生を参加率に加えるのは妥当ではないと考えているとのこと。

卒業要件やディプロマ・ポリシーに関わる重要科目でございますので、当該年度に参加できなくても翌年度以降の参加率に加えるというのは当たり前ですね。

○生駒委員

結果的に100%と。

○山沢委員長

それで大丈夫だと。

○生駒委員

この回答を得て判断がbは変わるでしょう。

○山沢委員長

伊藤さん、いかがですか。

○伊藤委員

質問をさせていただいたのは、まず一つは、目標というのがやはり年度が変わるにつれて、解釈が変わってくるのではないかというところが確認したかったところです。中期目標の中でも、参加率について100%を目指すとされていて、当初私たちは全学生が海外プログラムに参加すると認識していると私は思っているんですけども、今回の記述の仕方は「参加を予定した学生」となっていて、ただ食健康学科については「全学生」という記述になっているので、まずその辺りの目標というのが、もちろんこの間の様々な変化によって、目標というのを私は卒業要件だと思っていたので、全学生が対象と思っていたんですけども、もちろん体調不良などそういうことがあるかもしれないのですが、全学生対象で実施するプログラムとなっていると思っていたので、ここの参加率というのはどう取るのかが、ある意味整理されていなかったところはあると思っています。

それから、ただ食健康学科とほかの学科との表記の仕方が、食健康学科は全学生で分母は100%は全ての学生ですが、グローバルマネジメントについては、参加を予定した学生と学科によってもその辺りがぶれているならばしっかりと整理していただいて、食健康学

科においても、全学生が全員参加を予定したので、100分の100なら、そのように記述していただいたほうが分かりやすいかなというのが1点です。

それから、bにしたのは、簡単に言うと、山浦委員もその前の11の御質問に書いていたのですが、元々海外へ行くということが非常に大きなこの大学の教育の方針の中では重要な位置づけをしていたと思うので、オンラインで実施が終われば、つまり「実施しました」で、果たしてこの目標のクリアとなるのか。目標としては中期目標そのものが実践的な英語力を身につけるとか、グローバルな視野とか、たくましさを身につけるとかという中期計画の目標がオンラインで本当に達成されたのかという効果的な部分については、逆に言うと、ほかのこれから受ける学生さんたちが、オンラインでやったから大学としては役目を果たしましたと言われてしまうのかと。そういうことならば、それはちょっと残念なのかと思いました。

ある意味、もしオンラインで開催したといっても、実際に海外に行っているいろいろな体験をするのと、オンラインで日本にいて、講座は取りあえず3か月ぐらいその都度オンラインで聞いたから当初目的を達成しましたとはやはり言えないのではないかと思います。

ならば、ここから先の手当の仕方ですね。いわば実際には卒業要件にも関わってくる話なので、学校としてはオンラインで実施はしたけれども、実際に卒業後においても、海外に行く、実際に海外プログラムを受講したいという意向のある学生には、例えば卒業後も門戸を開いていますというような、もちろん費用については様々なやり方があると思うんですけども、去年受けられなくて、今年に1年ずらして行ったオンライン研修だと思っんです。去年受けられなかった子たちが今年受けます、しかもオンラインですかというと、その子たち、ちょっとだけ耳にしたのは、実際海外プログラムに参加したいから留年したとか、そういう話を耳にした気がするのです。

そういう意味でいうと、本当にオンラインでやったから、すごく御苦労があるとはもちろん思っていますが、aという評価を出していいのかと。それは、大学が本当は海外プログラムを受けたいと思っていた子たちに、オンラインでやったから、評価委員会も実施したんだからそれでいいじゃん、だからaですよと言ってしまっているのかと。私はやはり大学の本当の意味とか、これから受ける学生のためには、もちろん海外プログラムが受けられないときはオンラインも用意しますが、あなたたちの本来の夢を叶えるために、やはりこれは中途半端なやり方ですと、評価委員会はそう思っていますという意思表示はしてもいいのかなと思ったのでbです。長くなってすみません。

○山沢委員長

ありがとうございます。本当にそうですね。今、伊藤委員が提案されているように、過年度生というか、卒業した後でも大学の実施する海外プログラムに応募して参加できると、そういう道を残していく、大学としてそういうことを進めるというのは絶対に必要ですね。じゃないと、グローバル対応の学生を出していますとはなかなか言えないですね。

○生駒委員

今、コロナの環境下で大学としてできることはやったと思うんです。大学側は、海外プログラムは現地での研修と同等の学びを得られると、同等の効果が得られる授業を行った

という回答をしていたんです。

それに対して私が小項目 61 でその質問をしたのですが、それは同等の学びはどんな計画で実行されたんでしょうかというこの回答が1、2に書いてあるんです。研修先の協力を得てこういう環境を整えて実施をされたということで私は評価をしたんですけども、それと学生の2割が満足していないということについて大学側の回答が載っております。これを参考にして評価できないでしょうか。

今、確かに海外に行って授業を受けるというのは、英語力含めて違う効果も学習の機会を学生に与えられて、それは必要だと思うのですが、今、海外の授業もオンラインで受けられるようになっている、そういう環境下にある、前回それをもっと充実させてくださいと要求したのですが、それはここの回答では、そういったオンライン環境でも学習効果の高い授業を実施するという回答に一応なっています。フォローアップもしたと。

ずっとこの環境が続くのであれば充実していくしかないですね、現状では。

○山浦委員

やはり行ったのと行かないのでは全然違う。この評価を、できるだけやったからという評価をするのか。できなかったんだから、不可抗力であってもこれはbとするのか。できなかったという事実でやるのか。やはり評価の仕方として、どこを評価するのか。やったという事実を評価するのかどうかだと私は思います。

○生駒委員

目標設定のときの想定外です。コロナからもう2年、3年たっていますから。計画との兼ね合いをどう評価するかですね。

○山浦委員

この項目をa評価としたのは努力を評価して、それに近いことを教育するということで。

○山沢委員長

伊藤委員も、大学側の教員の努力についてはそれなりに努力はしているのは分かるが、しかし本来の海外での身につけるべきグローバリズムというのは得られないではないかと。得られないから、そこを後からでも補えるような方法というのをきちんとここで提案しておくべきだということですね。

○伊藤委員

はい。やはりこれは外へのメッセージにもなると思うので、代替案をものすごくある意味先生方は命懸けで実行しましたと。しかしそれは、本来自分たちが目指している目標を必要十分に満たせるように、ものすごく努力はしたけれども、やはりそこに完全に満ちるものではないという視点はあってもいいのではないかと思っています。

○山沢委員長

ただいまの視点を、評価委員会意見として表記した上でaというふうにはまいりません

か。

○伊藤委員

私自身個人的にはbで、委員会全体としてaでも。

○山沢委員長

では、そういうふうにさせていただきます。

次は小項目13、これは研修の訪問国及び研修先大学等の資料を収集する、準備としてやるということです。これはいろいろな状況があつてですが、資料の準備ということでございますので、一応準備はしたということでaという評価で、これはよろしいですね。

次は小項目14ですが、ここからの14、15、16、17で、学生の英語力をTOEIC600点以上になるようにすると。さらなる向上を目指して平均点700点以上を目指すということです。そのために、14、15、16という準備をして17でさてどうなったという評価になるわけです。

そういうふうに見ていきますと、まず小項目14でGlexa(グレクサ)というeラーニング機能により教材の配信や授業を管理する学習支援システムを活用するということで、英語集中プログラムとして全学生に週4回授業を行ったということです。それでどうなったかというのは後で出てくるので、やったということでaにしています。

次の小項目15は、3・4年次の学生を対象にして高度なリーディング能力とライティング能力を目指す科目が一つ、それから高度なコミュニケーション能力を養う科目、高度な英語力と世界の文化・社会に関する教養を同時に涵養する科目、この3種類を開講すると言っているわけです。3・4年次で3学科ですので、10科目の英語科目を開講しているけれども54人しか受けていない。2学年ですから500人ぐらいいる。でも、大学側としてはちゃんと開講したということでaをつけています。

伊藤委員は、たぶん内容がないということだと思いますが、伊藤委員、ここの評価をお願いします。

○伊藤委員

事前にいただいた大学から来た英語のクラス分け基準の2枚目に3・4年生の英語科目の履修実績が載っていたのですが、全体で、3年生、4年生に対する課題というのが今回の評価の中では出てきているのかなと思って拝見していました。

先ほども3年生、2年生の課題のことはお伝えしたのですが、ここでは、やはり大学がどういう人間を育成していくのかというところで、3年生と4年生は、1・2年生のときに、わりとTOEICの点数が上がらなかった年代だったと思うのですけれども、この人たちに対して大学が非常に考えてすばらしいプログラムを提示したと思っているのですけれども、全体に言葉のトーンが「開講しました」「実施しました」ということで、それに対してどのような効果があったのかという実績の部分や効果の部分について、特に具体的な目標設定がされていたわけではないというところは課題だと思います。

ただ、評価のsからabcdを見ていると、実施しているというところでパーセントが

出ているので、私は評価をしていくときに、実施したということが100%ではなくて、実施してそれに参加した人たちがどのぐらいの率なのかという、実施の後の運営や運用の状態も今回評価視点として拝見していました。

ですから、そういう意味からいくと、54人といっても開講できなかった講座もあつたり、1人という講座もあつたりということで、総じて3、4年のレベルの違い、1の部分是非常に人数があつたのですが、それより上のレベルのところは人数が一桁ということもありますので、開講はした、さらに受講という実績からいくと、aという評価を出しているのかというところではb、おおむね実施計画どおりということで評価させていただきました。

○山沢委員長

ありがとうございます。

今の意見にさらにお考えがあらうかと思いますが、小項目16番です。これは英語力を上げよう、TOEIC600点以上というのを目標にしていろいろな科目を設定した。さらに語学教育センターというところも、その目標を達成するためにいろいろ協力する、語学教育センターはこういうふうな目標を立てていますと、こういうことで学生の英語力のアップに協力しますと、実施しましたということです。

具体的に何をやったかという、TOEIC オンライン講座を開講して、2～3か月かけて4時間×4日間で行ったということです。アンケートでは高い評価を得たということですが、9人しか受けていないですね。この辺も、ちゃんと点数を取れなかった人のうちの何人で、どういうところがピンと来ません。山浦委員は、オンライン講座の受講があまりにも少ないということ指摘されています。

非常に少ないけれどもこれはどうなのかを事務的にも1回聞いております。それに対して、これは実は令和2年度もやっているんですね。令和2年度の講座と比べると、3年度はプログラム内容を充実して、講義時間も1.5倍ぐらい取れるようになって、学生にとってのハードルが高く感じられた可能性が考えられます、内容のレベルが高くなったと。答えになっていないのですけれども、受講者が少ない理由は、学生が計画を見て、今年はレベルが高そうで絞られそうだなということで受けなかったのではないのかと。

伊藤委員、これも小項目15番で述べられた理由と同じですよ。

○伊藤委員

はい。全学生だと964人ですし、3期生だけでも600点に行っていない数は200人ぐらい実際いらっしゃいます。その中でオンラインのTOEICの講座を、言語教育センターがされると工夫されているなと思います。

先ほど申し上げたとおり、実施しましたというのは、この4時間×4日間実施しましたというのと、ウオーキングイベントをしましたと、これで実施しましたということでaなのか、人数的にも実施回数的にも、a評価にしているのかということ、通常民間でやったときに、これでaかといったらすごく甘い評価の気がしてしまいます。

○山沢委員長

小項目14は、一応委員の意見はa評価でよろしいんですが、だんだん悪くなっていっ

て、15、16 と行くわけですね。その結果として17番で、具体的にTOEICはどのような得点だったのかということです。全然目標にもかからないということで、さすがに法人も、その結果についてcと。各委員は当然cということで、結論として駄目というのはみんな一致したということで、このcは確定でよろしいかと思います。

話を戻してまいりますと、15、16のbの評価についてどう考えたらいいかということです。

○生駒委員

前年度、小項目17はaではないかという議論がありました。山沢委員長がおっしゃるように、この小項目15や16の学生の成績のレベルに合った大学側の様々な施策の効果が17の結果に反映していない。そこがつじつまが合っていないのではないかと。お互いの評価を平仄を取ったほうがいいのではというのが我々の意見ですけれども、15、16がaで、17がcというのはどうなのかと。大学が打った手当が結果として反映していないのだったら、行ったこと自体aと評価していいのかという問題提起をされていると思うので、15、16をbにするという手もあります。要するに受講者が少ない、つながっていない、目標としている600点や700点に到達していない、そういう学生を放置している。要するに単位が厳しくないんでしょうね。目標の600点、700点に達していなくても、それはもう単位をもらってしまっていて、ほかの科目も履修しなければいけないから、そっちに時間が取られてしまうんですね。

○山浦委員

2年次終了時でしょう。

○生駒委員

そうです、そうです。

○山沢委員長

次は700点。

そういう意味では、変な話ですみませんが、15、16について、私はbとしてもいっこうに構いません。あと生駒さんと山浦さんがどうか。

○山浦委員

私は評価を下げていたんだけど。

○生駒委員

今、そういう提案があったんですけども、今年は目標達成見込の評価をしなければいけない。それをつなげるには、ここをbにするというのは、一つ必要な手だと思うんですね。

○山沢委員長

では、bにさせていただきますか。

○生駒委員
結構です。

○山沢委員長
山浦委員、bでよろしいですか。

○山浦委員
いいですよ。

○山沢委員長
沼尾さんには私のほうから説明します。そういうことで、15番がb、これは法人評価と違いますので、先ほどの議論をもう一回きちんと文章にまとめていただいて、私が読んでチェックします。

○生駒委員
14番はaでいいですか。

○山沢委員長
小項目15、16は評価委員会としてはb評価とします。14もbじゃないかという話があるのですが、Glexaというeラーニングのシステムが。

○山浦委員
最初はこれbだったはず。

○生駒委員
そうですね。

○山沢委員長
これは、最初るとき、令和3年のときはGlexaはないですよ。たぶんないと思う。それで何をやっているということ。

○山浦委員
これはいろいろ施策をやっているけれども、これはこれでやったと。次がcですね。もう1個これは施策が足りないということもある。このこと自身はちゃんとやったけれども、もっと違う施策をやらなきゃ、600、700点にならないという考え方もあるので、これはたぶんbでしょうね。参加状況、bかcか。それはそれとして、要するにこれを一生懸命やっても、小項目17番は進捗しないんじゃないかと思うんですね。だからもっと違うことをやらないと。

○生駒委員

大学側が中期目標達成をbで評価しているんです、cじゃなくて。

○山沢委員長

中期ですね。

○生駒委員

でも、私がcにしたのは、取り組んでみたら、成績の底上げを毎回図ってきているんですよ。そこをみるとbじゃないかと法人は言っているんですけども。

○山浦委員

点数を上がったとか書いてありますね。これはちょっとよく分からないけれども、入ってくる人の英語の素質が上がってくるんじゃないかと思う。

○生駒委員

いやいや、点数はすごく低いですよ。

○山浦委員

前回より入学者のレベルが上がっている。

○山沢委員長

英語ができる学生が増えている。
それは学長のねらいどおりで。

○山浦委員

英語ができる人を入れるというのも施策に入る、変な話だけれども。

○山沢委員長

すみません、先ほどの小項目14番ですけども、Glexaというシステムは新しいシステムですが、これは一応eラーニング機能により教材の配信や授業を管理する学習支援システムになっているということ。これを導入してきたということで、私はそういう意味で、一応eラーニングを使う英語の授業支援を導入したかということで実はaです。

次回のときに、きちんとこの辺のコメントの文章をきちんと作りまして、私はこう考えますというのを出しますので、今のところの考え方としては、小項目14はa、15、16はbというイメージであります。17のcはしようがない。

次は18です。英語集中プログラムの実施に当たって、入学前のプレースメントテストの結果によってクラス分けをしていて、効果を上げていると言いたいらしいのですが、クラス分けをしているということかと思えます。そういうことで、大学側は自分たちはaで、私どもも一応aになっています。よろしいですか。

○生駒委員

全クラスどういう編制をしたのか、山沢委員長が法人へのヒアリングで意見を付していたと思います、。

○山沢委員長

今までの英語の授業で、英語の教員が学生に向かって英語力を上げるというのは、やはりレベルの同じような子を集めて授業をするのが一番いいですね。でも、ここで求めているのは全員の能力を高めよう。そのためにどうしたらいいんだとなったときに、やはり得意な子も不得意な子も、特に不得意な子が得意な子と一緒に頑張って勉強するということはすごく大切だと私は昔から思っている、自分ができなかったのもう思うんですけども、そういうときに、できる・中くらい・できないというクラスをつくって何の意味があるのかと思っていたんですけども。

英語ができる子を上げるのはそれはそれでいい。でも、先生が教えるのは、今この県立大がやっているようなクラス分けのほうがいいんでしょうけれども、全然英語ができない子で何とかこの大学に来て600点を超えましたというのが出てくるのは、違うんじゃないかなと思って。

○生駒委員

その意見に賛成で、ネイティブの教員を増やしたようですが、英語の成績の低い人は日本人のほうが教育は向いていると思うんです。英語をベラベラやられたって分からないんですよ。底上げにならないです。分からないまま終わってしまう。日本人が不得意な人を教えるというのも一つだなと。そういう人を集めてね。

○山沢委員長

だから、このモチベーションになったというのは、駄目なクラスに入ってしまったって悔しい、頑張ると。でも人間そうじゃないんですね。

○山浦委員

教育論の中身についてはよく分かりませんね。

できる人に対する教え方と、できない人に対する教え方が違うので。一緒にいるとどっちなかに合わせなきゃなくなると、うまくいかないということはあると思うから、だからそういう考えもあるし、いろんな考えがあるから。

○山沢委員長

ということで、18はaということだと思います。

○山浦委員

どちらかというと少人数でやればいい。

○山沢委員長

次は、1「教育」の中の(2)「入学者の受入れ」についてです。小項目19番は、積極的な広報活動をしているということでございます。ホームページをきちんと新しくし、大学案内等を効果的に活用して、アドミッションポリシーをはじめ、教員、学生生活、イベント等に関する魅力ある情報を掲載しているということでございます。

最初のときは、全然ホームページが駄目だったのですが、最近はということで、法人もaという評価で、私どもも委員全員aということで、これはよろしいですね。特にホームページについては前よりは良くなっているということでaということになります。

次は小項目20番です。広報戦略に基づいて、幾つかの広報活動をしているわけです。高校での説明会、これは生徒向けですね。それから進路指導教員向けの説明会、これはオンライン。リアルタイム配信型のオープンキャンパス、進学相談会への参加、学長による高校訪問の実施等々でございます。こういうことですが、書いてあるとおり、実施しているということございまして、全員aという評価で法人と同じということです。

次は小項目21番です。2021年度からの大学入学選抜改革を踏まえ、適切に対応する。また、これまでの入学者選抜の状況を検証し、2022年度以降の入学者選抜方法の改善に向けて検討していくということです。果たしてちゃんとできているかどうかよく分かりませんが、具体的には、文部科学省が求める感染症予防対策を鑑みて、入学者選抜の実施方法について検討を行って、入学者選抜要項を公表したと。コロナ対応ですね。

それから、グローバルマネジメント学科の編入学試験もちゃんとできましたと。総合型選抜では、新型コロナウイルスの感染拡大によってオンライン実施に変更したけれども、そのほかの選抜試験については、従来どおり、要項どおり実施したということです。コロナ禍によっていろいろ影響を受けたのですが、グローバルマネジメント学科の総合型選抜についてはオンライン実施で、あとはちゃんと要項どおり実施できたということでございます。委員はaの評価、大学もaの評価ということでございますので、これはa評価としたいと思います。

次は小項目22番です。22、23は他大学からの編入学、他大学との単位互換の制度が今回やっとできたということです。まず22のほうは、22年度編入学試験の募集要項を作成して周知をしたと。編入学試験も実施したということです。グローバルマネジメント学科です。

沼尾委員が質問をしております。「編入学制度の導入に当たって、単位認定に関する相談の仕組みや英語・外国語試験を通じた単位認定などの工夫をされたということです。では、実際に面談等を通じて出てきた課題を含め、編入学生の履修や学びの環境を確保する観点から、必修科目の設定や単位互換、あるいは4年間で卒業するための対応等について、ちゃんと調整しているのですか」ということを聞いております。しているとしたら、具体的にそのことからどういう課題が出てきましたかということです。

その回答は、「本学は卒業に必要な英語の単位数が、グローバルマネジメント学部では10、健康発達学部12単位と、他大学と比較して多いことから、英語力の高い学生たちの場合はTOEICスコアによる単位認定を最大6単位まで認める制度を準備した」と。「準備に当たっては、教務委員会及びその部会と教育研究審議会にて論議を重ねた」と。みんなできちんと考えて、TOEICのスコアで単位を増やしているということは言っております。本

学の英語の単位数が多いということは、きちんと編入学でも対応できていますよということには言っています。

そういうことも含めまして、22番は委員全員がa評価で、大学もa評価ということでございますので、いいだろうということで、aとなります。

次は小項目23番で、これは単位互換の中で、長野県で高等教育コンソーシアム信州というものがございまして、県内の11大学が加盟しておりまして、そこで単位を互換できる科目を開講している、私の授業でやったことがあるのですが、そういうふうな開講科目がございまして。そこに県立大としても初めて参加したということでございます。

これは、学生が他大学の授業を受けるということもありますけれども、県立大の授業を他大学の学生も受けることにもつながるものでございます。これは大変前向きに取り組んでいただきたいと思っております。一応始めたということですので、a評価ということでよろしいのではないかと思います。私としましては、ぜひ積極的に参加していただきたいとコメントしたいと思います。積極的というのは、自分のところで開講する科目を増やしてくださいと。学生を聞きに行かせるのではなくて、聞きに来させる、そういうことをしてほしいと思っております。

次は、(3)教育の質の向上に関するものです。

最初は小項目24番、成績評価にGPAで成績を可視化すると、Grade Point Averageと言うのですが、このGPAで、あなたの1年間の単位はどのくらいに評価されますよという評価の仕方を世界的に使っているわけですが、本学もそれを実施するようになったということです。ただGPAをしたというだけでありますけれども、GPAをやると、専門にかかわらず点数が出ておりまして、私の経験で言いますと、自分の科目を受けている学生が、ほかの科目を受けたときとどのくらい点数が違うかというのが分かってくるので、それは結局学生の力はそんな変わらないかもとすると、自分の教え方が悪かったのかな、良かったのかなと、そういうことも考えられる。

学生が、こういうところがありますからそうは言えないから全部言えないのですが、それが10人、何十人という単位で入ってきますから、GPA制度というのは、学生にとっても評価を比較的、統一的に表すというのはいい目標になりますけれども、教員にとっても非常に重要なことに使えるということです。その辺の認識が足りないということで、私はbにしたわけです。山浦委員いかがでしょうか。

○山浦委員

これは単純に私は最初からbだったけれども、最初はGPAを入れていなかったんですね。入れなくてもbなんだから、入れたらa、もっとやるのだったらsだと私は思ったから書いただけであって。

○生駒委員

これはやはり判断理由のところ、なぜbに評価したのかという理由を書き込むべきだと思う。だけどそんなことを言っても後の祭りだから、反省材料にするのだったらちゃんと書けといたい。

○山浦委員

そういう評価というのは、改善に結びつけられなかったからbと説明しているんですね。けど、ほかの項目もそう説明したらいい。ここだけ大学の答えが矛盾してるんですよ。

○生駒委員

判断理由を読んだだけだと何でbなのかが分からないんです。

○山沢委員長

それはある。

○生駒委員

だから質問をしたんですけれども、山沢委員長はお詳しいんでしょうけれども、法人は分布の検証や課題の整理が不十分だと言っているんですよ。

○山浦委員

最初はcだったからと思うんですよ。

○生駒委員

だから、去年もやっていないし、今年もやっていないというのは、やる気はあるのかという話ですね。だから自ら自分のやっていなかったことを書いて、b評価の理由が書いていないというのは、分かりにくい。

○山沢委員長

山浦委員がいいということですので、委員会のb評価はお認めいただけるということですので、委員会としてbというふうになります。

次は小項目25番です。これは予習・復習等のやり方をいろいろ具体的に述べる方法でございます。実績がちょっと分かりにくいんですけれども、予習・復習等について、シラバスに具体的に記載し、学務システム及び大学ホームページで公表したということです。学生に対してガイダンスでの説明や履修案内、学生便覧の配布により、学務システムへの接続方法などの使い方を周知した。令和2年度に増強したG1exaについて、学生には新入生ガイダンスで周知したと。12月には全学生向けの学生調査(大学IRコンソーシアムと連携したもの)を行い、予習・復習時間を含めた学修時間の把握に努めた。それがどのくらいかというのは書いていません。

これに対して、生駒委員から、「授業の方法に応じて、どれぐらいの時間を予習・復習に掛ければよいか、シラバス等で学生に目安を示すと共に成績が芳しくない学生を指導する指標としたらどうか」と。それから、伊藤委員からは、「全学生向けの学生調査を行い、予習・復習時間を含めた学修時間の把握に努めるとありますが、努めた後のフォローアップの状況はいかがでしょう」と聞いていらっしゃいます。

それに対する答えとして、大学側は、「個別の学生へのフォローアップという趣旨であれば行っていません」と。一方で、「全体的な予習・復習時間の傾向を教育改善に生かす

ことについては今後検討していきます」ということだそうです。

○生駒委員

少なくともこの授業一コマについてどれだけ予習と復習が必要なのかというと、シラバスに具体的に記載しているというんだけど、何が記載してあるか分からない。それに対して把握したと言うんだけど、把握しただけで、フォローアップしていない。もう少し有効活用をしたらいいと思う。この辺りをコメントに記載したらどうか。

○山沢委員長

伊藤委員、いかがでしょうか。今、私が読み上げたものですが、結局一応アンケートはとったけれども、個別の利用には使っていない。今後、教育改善に活かすことについてはどうしたらいいか検討していきたいということだそうです。

○伊藤委員

まず一つは、学生調査の結果をいただいておりますが、1年生でも1週間当たりどのぐらい予習・復習に費やしたのかというところが、1週間で2時間というのが半数ですね。1時間～2時間が29%で、1時間未満が13%、これは3・4年生ですけれども。1週間で、1日ではなくて1週間での予習・復習というのが、3・4年生になると半数はもうほぼ2時間以内ということは、大学の目標としては、学習内容が身につくように予習・復習を促すというところは、それほど予習・復習しなくてもいい学習内容になっているということもあるのかもしれませんが、やはり学生の学びの質を高めていくということが、こういう事前学習とか、事後も含めて、課題として大学が思っているという目標を提示しているならば、やはり実際に学生がこのぐらい勉強せざるを得ないような学習内容の提示は必要なかと思えます。

この目標値に対しては、1日2時間とかなら分かりますけれども、1週間で2時間以内というのは、あまりにも大学生の予習・復習時間として、現実そうなのかもしれないんですけど、大学が考えている目標からいくと、少し短すぎるかと思えます。

ですので、その上で、先ほどのお話のように、それぞれの科目の中でそういう課題があるならば、どういうふうに授業が進行していくのかということに対して、改めて先生方が参考とするような、資料としてこういったものも活用していくのかということからいくと、「把握に努めた」で終わっていて、そういう意味でいうと把握はしたかもしれないけれども、活かされているのか。

○山沢委員長

結論としては、私も全く同じ意見ですが、具体的な予習・復習はこのぐらいで、こういうふうなことをきちんと準備してほしいというふうなことを言わなければいけないと思うんですね。それを出すべきだということをコメントとしてきちんと書いておきたいと思えます。

ということで、委員会としてはaだけれども、伊藤委員はbで、委員会としてはaということよろしいですか。

○山浦委員

世界だと卒業のほうが大変で、とても4年では卒業できない。日本は卒業できちゃうから、それはやはり大きい。

○山沢委員長

それでも卒論とか、4年生ぐらいになって、理系の場合は卒論が入りますけれども、そうなるにさすがに勉強しなければ駄目で、1日1時間、2時間は予習は当たり前ですが、1年生、2年生はバイトが忙しい。

○生駒委員

コメントを従来つけているんですけども、**法人と評価委員会の評価**に食い違いがないと、大学側は回答もしてこない。コメントをつけると、大学側も対応を検討するんだけど、評価はaにしてコメントつけても何の反応もないんですね。

○山沢委員長

いや、そこはよく言きましょう。

それでは小項目25はaとなります。

次は小項目26番です。授業にディスカッションやディベート等を含めることによって、学生の学びの意識を高めるということですが、具体的にどうやっているかは書いていません。大学としてはa、委員としては皆さんaでございます。これはaとしたいと思います。よろしいですね。

次は小項目27番、大学院の話です。具体的に何をやるかというのが、令和3年度における実績が書いてございまして、令和4年度以降の新カリキュラム編成を検討するため、各学科における新カリキュラム編成のワーキングチームをつくったということで、ワーキングチームでカリキュラムの検証を行ったということです。それから、新カリキュラムにおいては、複雑化する現代社会に応じた多様な学びを可能にするための科目、例えば、「ジェンダー論」「マーケティング・リサーチ」「保育とICT」といろいろございますが、そういう新カリキュラムを考えているということです。

これに対して、沼尾委員から、これからの社会経済のドラスティックな変化に対応するので、科目のそれに対応したような見直しをきめ細かくしていかなければいけないのではないかとアドバイスでございます。評価は全員aでございますので、aとします。

次は教員の質を向上するために教員に研修をさせるという項目で、小項目29、30、31とございます。小項目29がFD研修を4回やっているということで、1回以上参加した教員は100%と。沼尾委員が、FDの研修で具体的に何をやったのかと御質問されていまして、これに対して回答の資料を頂いております。それを見ております。そういう観点で全員aという評価で、大学と同じでa評価としたいということでよろしいですね。

次は小項目30番です。学生に対する授業改善アンケートを学期ごとに年4回実施していますが、それについてです。沼尾委員から、改善していると言っているが、「具体的にどのような改善が図られたのか。そのプロセス並びに結果が示されていないのでbとしてい

ます」ということでございます。

○生駒委員

私もそこはbにしたいと思います。

○山沢委員長

ちょっと待ってください。ここは、「アンケートの方法だけであって、アンケート結果を担当教員に知らせるとともに、その結果に対してコメントの入力を各教員に促すとありますが、具体的にどのように促したのでしょうか。例えば、教員会でアンケート結果について話をしたとか、そういう具体的な例があれば教えてください」ということです。

それに対して、「アンケート結果を科目担当教員にメールで通知するとともに、結果を踏まえたコメントとして教員の所見及び改善に向けた今後の方針を記載してもらっています。従って、促した方法を問われているのであれば、担当教員へのメールとなる」ということでございます。担当教員には連絡して、こういう評価だけどあなたはどうかと。改善をしなければいけないけれども、今後どういう方針で臨むのかということは記載してもらっているということです。

○生駒委員

それは私の質問ですね。

○山沢委員長

後から聞いている質問ですね。

○生駒委員

大学側の判断だけだと、各教員任せになってしまいますね。でも改善策まで出させたという回答に変わっているわけですね。

○山沢委員長

そうですね。

○生駒委員

それを踏まえると、沼尾委員がおっしゃるように、委員会でそれをもんだかという話ですね。そこまでやっているのかどうかですね。私も経験しているけれども、アンケートの結果が来ます。けれども教員任せですよ。そこから進んで、対策に対して協議したとかというところまで行っていないかと思うけれども、もしそこが進んでいないのであれば、進めるべきではないかと。教員任せではなくて。どうなんでしょう、信州大学では。

○山沢委員長

学科によってはやります。

○生駒委員

先生の評価というのは、アンケートでは悪口を書かれる**こともあります**が、積極的な改善につながるようなアンケートであれば取り組む必要があると思います。。問題点、課題を共有して自分の教科、学部の中で、専門科目なら専門科目の教員同士で授業の参観とかそこまでやるようなことを書き込んだほうがいい。

○山沢委員長

メールで問い合わせ、その回答として教員の所見及び改善に向けた今後の方針ということについて、委員会、あるいは教員会議できちんと議論すべきであると。それは授業改善委員会というところであれば、それを議論してほしいと。ただ、じゃあこのメールの返事は誰が受け取っているのかと。そういう問題がありますから、やはりこれは授業改善委員会できちんと議論してほしいというコメントをつけるということによろしいですね。では、そういうことを入れてaとさせていただきます。

次は小項目31番です。教員相互の授業参観でございます。山浦委員がおっしゃっていませんが、教員相互の授業参観は何科目についてやったか、どのぐらいの数をやったかが書いていないので、一つはやっているのは間違いないんですが、あとは全然やっていないというのは非常に問題で、山浦委員は、もう少し科目の幅や参加人数を増やして切磋琢磨する雰囲気づくりを考えてほしいということを行っています。

山浦委員、よろしいですか。

○山浦委員

授業参観科目は、一科目だけなんですかね。

○山沢委員長

それだけのようです。一つ二つやっているような雰囲気なんです。ではここは、山浦委員のコメントをもう少し充実させて、厳しく書いた形に委員会として付したいと思います。ということで、aとさせていただきます。

次は小項目32番です。コロナ禍における全寮制、従来と違う方法で工夫をして実施したというものです。これは大学側も委員もaなので、aでよろしいですね。

次は33番、同じく寮生が中心になるのですが、象山未来塾というのがございまして、寮生がいろいろなゲストと話をしたり、講演を聞いたりするというものです。それを2回やっています。第1回は、県の健康福祉部の薬事課の麻薬Gメンが講演。2回目は元Jリーガーの方が講演をしたということです。これはaでございます。よろしいですね。

次は34番で、同じ象山寮です。今度は寮の運営です。ユニットリーダー会議、ここでいろいろ工夫して学生寮の統治を行っています。コロナ禍を考えてきちんとやったということです。地域の人にもサービスマーケティングをきちんとしているということです。大学側はa評価、委員もaですので、a評価としたいと思います。

小項目35番は、寮生活を先輩が指導する。レジデント・アシスタントというのですが、後輩を指導していくというシステムです。これについてもきちんとこなしたと。そんなに数はやっていませんが。レジデント・アシスタントの令和3年度入寮枠を確保できなかった

たため、3年度の入寮を断っていますから、2年度の先輩寮生の中から3名の上級生をアルバイトとして雇用したと。これも大学側はa、委員もaということです。従いましてaでお願いいたします。

次は36番、学生の地域との連携・交流につながる取組をソーシャル・イノベーション創出センターやキャリアセンターが推進しているのですが、その一つです。地域の企業や市町村等のプロジェクトに学生が自らの問題意識に基づいて大学での学びを実践の中で深める学習をきちんとこなしたということで、松川町、王滝村、池田町のカミツレ研究所、学生起業会社が日本財団・長野県みらい基金のプロジェクトに応募して、受託的に契約をしたと。ほかにもあって、なかなか活発な活動をしているということです。

これに対して生駒委員と沼尾委員はaの評価です。生駒委員、これはsではないという評価ですが。

○生駒委員

最初の頃はs評価をつけていましたが、この沼尾委員が書かれている目標を上回る成果として何が目玉なのかが分かりづらかったと。山浦委員も、学生がどの程度参加しているのかと。従って、地域連携の件数とか、学生の参加数とか、これがだんだん増えていくような傾向で取り組んでいるならば評価するけれども、目標と管理というか、達成がこれでは分かりません。前年度と同じことをやっているのだったらaではないかという感じなんですけれども。前年度対比で増えたかも分からないし、参加人員が増えたとか、要するにそういう目標管理の把握をやっていないんですね。

大学によってはこういうものを数値化して、評価しているんですけれども、そういうことはやらないんですね。

○山沢委員長

これは聞いてくれますか。年度別の事業件数、参加学生人数がどう移っているかを聞きたいと。その上で判断するということがよろしいですね。

伊藤さん、今の御意見でいいですか。

○伊藤委員

はい。

○山沢委員長

もう少し行きましょう。

小項目37番です。就学困難学生への対応ということでございます。令和3年度の実績で、奨学制度給付が104名、貸与が196名、2種の貸与が147名、授業料前期分免除が109名等々でございます。生駒委員はsをつけられていますので、意見を申し上げます。

○生駒委員

退学者はいたんだけど、経済的理由の学生はいないという回答なんです。それはJASSOの支援とか、長野県の支援もあるんですかね。そういうことで、そういうものが充

実していた。10%強が全国平均か分かりませんが、そういう努力の結果経済的理由による退学者がいないというのは評価してもいいんじゃないかと思いました。

○山沢委員長

山浦委員は、手厚いと言っているからには……

○山浦委員

こういうものは結構ルールがあるんですよね。こういうのであれば幾らでやるとか、そういうものが他大学に比べて手厚いのかを知りたいと。

○生駒委員

一番最後の海外プログラムでは、採択されたけれども実施されなかった理由として、留学しなかったからでしょうね。経費がかからない、発生しないということで。

○山沢委員長

そういうことになりますね。

○生駒委員

でも申請はしたんだけど、このプログラムを実施しなかった。

○山崎高等教育振興課長

実際に行かなかったからということです。オンラインだったので費用がかからなかったという説明ですが。

○生駒委員

でも申請はしたわけでしょう。

○事務局

そうですね。プログラムの申請は JASSO にして。

○山崎高等教育振興課長

行く前提で申請をしたと。

○山沢委員長

生駒委員、これは a でもよろしいですか。

○生駒委員

これは何か比較のデータはあるんですか。

○事務局

JASSO の就学支援金制度自体は国の制度ですので、大学は登録しなければいけないんですけども、金額や要件は一緒になってきています。

○山崎高等教育振興課長

ほかの大学並みに手厚いかどうかというと、この「食」のおこめ券となっていますが、県立大学は寮なので、これを自宅の方に払ったというところぐらいで。

○事務局

JASSO の助成金とここに書いてありますが、同窓会が時々寄付してくれる、その寄付金を財源にしてこのような支援を行ったという大学の説明です。これは県立大学のやり方で、そのほかの大学も JASSO というところからお金をもらって、それを財源にして大学なりの支援をやっているというのが実態です。

○生駒委員

長野県から授業料免除、交付金が出ているよね。ここは独自ですか。

○山崎高等教育振興課長

それが修学支援新制度という国の制度です。

○事務局

国立大学と私立大学は国から直で行くんですけれども、公立大学は設置団体から交付金という形で行くものになります。仕組みは一緒です。

○生駒委員

じゃあ a にしましょうか。

○山沢委員長

では、生駒委員が a ということで御了解をいただきましたので、委員会としては a という評価になります。

次は小項目 38 番で、学生の健康診断の受診率 100% 目指すということです。具体的にはどうなっているかということが書いてあって 98.5% ということです。

委員は全員 a、大学側も a でございます。これはコメントも特にないということで、a としたいと思います。

小項目 39 番、大学食堂のことでございます。食堂において新型コロナ対策としてのパーティションの設置等々、メニューの改善を行った。これは大学、委員とも a の評価ということで、a にしたいと思います。

次が小項目 40 番、学生へのキャリア支援です。県内企業等への就職促進に取り組むことというのが一番大きな目標です。具体的に何をしたかということ、令和3年度に関わる実績ですが、まず1年次生を対象に、教員と連携の下、発信力ゼミ、1年～4年生対象の個別相談体制を強化、1・2・3年生を対象としたインターンシップガイダンスを行った。そ

れから、2・3年生を対象にし企業と連携して学内説明会を実施した。3年次を対象にして17回の就職対策講座を開講したということでございます。

大学側はsの評価、委員もsということ。コメントもいろいろいただいております。この辺のコメントをさらにいい文章に直したいと思っております。評価は、大学側と同じsの評価でよろしいですね。

次は小項目41番、夏季休暇中のインターンシップの実施、3年次を対象とした企業の人事担当者参加の説明会について、きちんとやったという報告です。これは大学側がa、委員もaということで、委員会としてはaの評価としたいと思います。

小項目42番、グローバルマネジメント学科の3年生34人がインターンシップを履修したということです。大学はa、委員もaですが、山浦委員から、インターンシップ先はどこかということです。回答してきていますか。

○事務局

単位に関わるものだけではないんですけども、夏のインターンシップ全体としてですと、官公庁など、単位に関わるものだけではないですが。皆さんにはメールで後でお配りします。

○山沢委員長

aの評価とさせていただきます。

次は小項目43、4年生全員とのキャリアセンター職員の個別面談、3年生を対象とした進路希望調査の実施結果を教員と共有する。さらに各学年で、1年生、2年生ではキャリアデザイン講座、3年生が就職ガイダンス、全学生向けにキャリア相談をしたということでございます。これが専門性を生かした形でできたということでございます。法人がa、委員もaですので、aの評価としたいと思います。

次は小項目44、食健康学科です。2・3年次生の臨地実習を設定しているわけですが、世界標準500時間の実習を確保したと言っております。具体的には、3年次の1・2学期にゼミナール、3年次の3・4学期から4年次にかけて卒業研究を開講して、研究的視野を持った実践力を持たせる。4年次には、総合演習を開講して、将来の管理栄養士として必要な基本的知識の整理と統合、応用力を身につけさせる。管理栄養士の国家試験については、個別指導や面談をしたのですが、30名いて1名落ちてしまったということです。

伊藤委員、これについて御質問されていますね。

○伊藤委員

aにさせていただいて構わないです、すごく迷ったんです。1名で100%でないことをどう捉えるんだろうと思ったんですけども、実際にはすごく頑張って、食健康学科がこの大学の中で一番堅実に目標設定をしたり、具体的な科目設定をしている中で進められているなと思いますし、退学者もいない状態なので、その中での結果はaでいいと思います。

○山沢委員長

では、委員会としてはaの評価ということよろしいですね。

次は小項目45番、こども学科の3年生に進路希望を取ったということです。学科に特化した就職ガイダンスを実施した。2・3年次生を対象としたキャリアガイダンスを2月に行って、4年生では保育系の就職ガイダンス、面接対策講座をやっている。出席人数は全員ではないのですが、そこに書いてある人数だそうです。大学側はaの評価、委員もaということでございますので、これはaの評価でよろしいですね。

あと一つです。小項目46番、こども学科です。2年次、3年次、4年次でどういう専門指導を行ったかということが書いてあります。2年次では「こども学ゼミⅠ」、必修で少人数。3年次では「こども学ゼミⅡ」、4年生では卒業研究、法人もa、委員としてもaということです。これもaでよろしいですね。

今日はここまでということで、。

(2)の「研究」、47番以降は次回お願いします。

予定の時間になってしまいました。次回は残りの小項目について検討を行いまして、今回保留してあるものもありますので、そこもやります。評価、コメントの整理、大項目評価、全体評価ということで次回は行いたいと思います。少し急いでやりたいと思います。

実は、生駒委員から冒頭お話ししましたが、2点伺っております。一つは、法人ヒアリングについて会議を非公開とした経緯。二つ目は、議事録の公開に際し、発言者の委員名を記載しない取扱いにした経緯についてお尋ねがございました。

○山寄高等教育振興課長

法人ヒアリングの件について、当時の担当に確認したのですが、初めての評価をR元年度に行ったということで、初めてということで評価項目の進め方についていろいろ見直すべき点があったということで、2年度の進め方について令和2年2月10日に、評価委員会と県と打合せ会議をやったとなっていて、来年度の評価作業のスケジュール案を示した中で、委員評価を円滑に進めるために法人とヒアリングを実施しようということで、ヒアリングの中で様々な質疑応答が予想されるということで、大学が公表していないような情報等のやり取りも考えられるので、ヒアリングはあくまでも委員の評価活動の一環ということで、委員会の正式な会議とは別の扱いで整理したと聞いています。その正式な会議ではないもので、一応公開はしないという扱いだ。

○生駒委員

その正式な会議じゃないという認識がおかしいのであって、評価委員会は業務実績表とヒアリングに基づいて、質疑応答しなければ判断できませんよね。そのヒアリングは重要な委員会活動の一つですからね。

おっしゃるように非公開にするのであれば、非公開の手続を踏んで非公開にしたらよかったと思うんだけど、十分そういうことを認識していなかったから。

○山寄高等教育振興課長

その時の整理としては、委員さんに御理解いただくのが不十分だったかもしれないのですけれども、ヒアリングはあくまでも議事として委員が議論して決めるものではないもの

で、一応委員会の会議ではないという考えです。

○生駒委員

正式な会議でしょう。非公開の部分があるのであれば非公開にすればいいのであって、議事録は議事録として残してほしい。

○山寄高等教育振興課長

ヒアリングを公開か非公開か、会議と位置づけるかという議論はならず、一応こういう形でやりたいというのを示した中で、ヒアリングは会議とは別という扱いで、ヒアリングはあるけれども、委員会の会議ではないという、そういう絵を示させていただいて。

あと議事録の公開の中で、委員名を記載しない取扱いになったという経緯と理由ということですが、これはうちの事務局で検討した中で決めたということで、議事録の作成に当たって、委員さんによっては評価に関する自分の発言がそのまま公開されてしまうと自由に自分の意見を言いづらいつつ、が考えられたことですから。

○生駒委員

今まで1回、2回は公表しているわけです。透明性を期するために、別に名前を出したとしてもそういうものに束縛されない、と思っているけれども。

○山寄高等教育振興課長

そこはこちらでそういう判断をしてしまつて。一応委員さんに確認するときにはマスクングして公表しますがと。

○山沢委員長

では、次回あたりにそこは議論しましょう。法人ヒアリングの公開・非公開の問題と議事録の公開について、次回か次々回どちらでもいいんですが、時間を取つて、委員としてどう考えるかという意見も集約して、それに沿つて4回目の報告は対応するとしましょう。

○山寄高等教育振興課長

最終的には委員さんのほうで決めていただければと思います。それはあくまでも私たちが案として示しただけなので。

○山沢委員長

これで一応議論は閉じさせていただきます。

4 その他

○山沢委員長

最後に事務局から、次回の予定の連絡がございます。よろしくお願ひします。

○山寄高等教育振興課長

次回の委員会ですが、祝日と休日の間で申し訳ないのですが、8月12日金曜日、13時30分から県庁という形でお願いしたいと思います。また開催案内はメールで後日御連絡いたします。また、次回の開催も、本日のウェブと対面のハイブリッドで行いましたけれども、同じような形で行いたいと思いますので、ウェブで参加する方につきましては、そういう形でよろしくお願ひしたいと思います。

5 閉 会

○山寄高等教育振興課長

それでは山沢委員長、ありがとうございました。本日は大変長時間にわたり御審議いただきましてありがとうございました。

以上をもちまして、令和4年度第1回公立大学法人長野県立大学評価委員会を終了いたします。本日はお疲れさまでした。ありがとうございました。

(了)